

命のつながり

沖縄県立那覇国際高校一年 上原 彩心

私には、元気な元気な曾祖母がいます。光子ばあちゃんと愛称で孫、ひ孫からとても愛されています。光子ばあちゃんは北中城村という、女性平均寿命が全国の市町村区で一番のところに住んでいます。そのせいか、元気の無い光子ばあちゃんを私は今まで一度も見たことはありませんでした。

ある日、光子ばあちゃんが私に問いかけました。「あみちゃん、沖縄戦の時に対馬丸っていう大きな船があるの知ってるね。」と。私は、「もちろん知ってるよ。疎開するための船だよ。」と答えました。私の小中学校は対馬丸の歴史を学ぶことができる対馬丸記念館と近いところに立地しており、平和学習などで何度も訪れたことがあります。光子ばあちゃんにどうしてそんなことを聞くのか訪ねると、光子ばあちゃんは私に昔の悲惨な思い出を涙ながらに話してくれました。

光子ばあちゃんが小学生の時、沖縄戦の影響で本土へ疎開しなければいけなくなりました。当時の沖縄は激しい地上戦が繰り返されており、とても安全とはいえない状況だったからです。その疎開するために用意されたのが疎開船対馬丸でした。数多くの女性や子供たちが長い列を作ってまわっている時です。光子ばあちゃんが乗り込む前に、対馬丸の定員が超えてしまい光子ばあちゃんは乗り込むことができずに、別の船に乗り込むことになったそうです。一見ここまで聞くと、対馬丸は後に敵の魚雷に当たり沈没してしまうのだから乗れなくてもよかったですじゃないかと私は素直に思いました。ですが光子ばあちゃんは、「お友達がたくさん対馬丸に乗ってね。私もその時は一緒に乗りたかったさあ。今になってはその友達に会うこともできないねえ。」と言いながら涙を見せました。光子ばあちゃんももし対馬丸に乗船していた犠牲になっていたら、今の私はこの世に生まれていません。偶然の奇跡から誕生したのが私の命です。それを知った瞬間に、体中に鳥肌がたちました。今まで過去の沖縄戦の実態を身近に感じられずにいましたが、光子ばあちゃんの話を知ると、戦争という過去がとて自分自身に感じ、他人事ではまったくないと気付かされました、光子ばあちゃん

の涙は、戦争の悲惨さと友達を失った深い悲しみを鮮明に訴えかけているように感じました。これ以来、対馬丸は私の中でとても大きな存在になりました。

中学校三年生の時、当時の校長先生の元へ対馬丸の関係者の方々が出て来ました。訪問理由は、私の母校である上山中学校の三年生に外国人向けに英訳をしてほしいといった内容でした。対馬丸記念館には近年、訪れてくる外国人観光客が多くなっているそうです。それに伴ってできた問題が、記念館には日本語の説明のみで、英語表記がないという点です。ですから、外国人は記念館を訪れても、内容をあまり理解することができませんでした。そこで私達が外国人向けに対馬丸の歴史を英訳することに、日本人のみならず外国人にも対馬丸の歴史を伝えていこうという取り組みが始まりました。学校の英語の授業で、なるべく私たちの知識だけで英訳に取り組みました。英訳最中は全員が集中し、どうしたら、当時の子供たちの悲しみが外国人に伝わるか、試行錯誤をくりかえしました。そして、約三カ月後私達は、対馬丸の英訳を完成させることができました。完成した時には対馬丸の関係者にとっても感謝され、中には泣いて喜んだ人もいたそうです。私達の英訳により、世界中の人たちにも対馬丸の事を知ってもらえると思うと、誇らしい気持ちでいっぱいでした。また、この体験は、私達の戦争への関心をさらに深め、平和への意識を強めた貴重な体験となりました。

悲惨な過去があつたからこそ、人々は平和を実現させ、私達はその平和な今を生きていくことができます。一人一人の命は過去から大切に繋がれてきた命です。これからの未来を担う私たちは、光子ばあちゃんのように悲しい経験をする人がいなくなるような世の中をつくる責任があると思っています。私は、対馬丸の歴史を忘れずに心に秘めて、命に感謝をし、一日一日を大切に生きていきたいと思っています。